

1 研究主題

「わかる」から「できる」へつなげられる授業実践
～鉄棒運動の感覚づくりを通して～

2 研究主題の設定理由

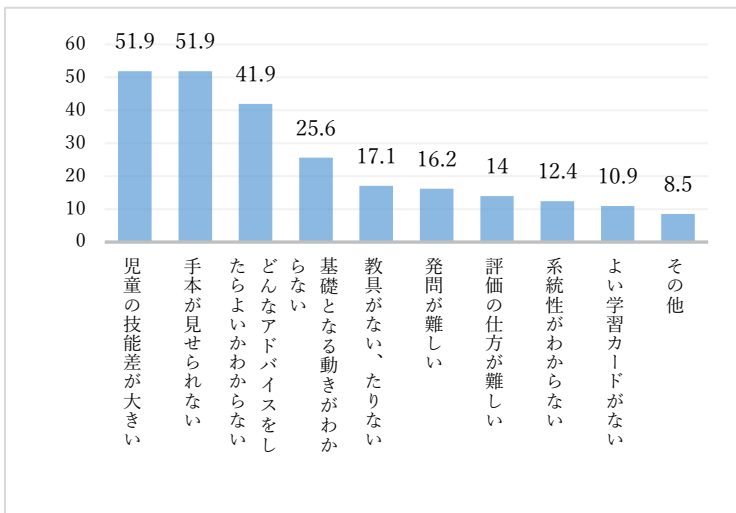
(1) 学習指導要領から

令和2年度から全面実施となった学習指導要領では、観点が「知識及び技能」となり「知識」と「技能」を関連付けながら資質能力を育成することが求められることとなった。鉄棒運動の中学年の目標では「その行い方を知るとともに、自己の能力に適した支持系の基本的な技をすること。基本的な技に十分に取組んだ上で、それらの発展技に取り組んだり、技を組み合わせたこと。」高学年の目標では、「その技を知るとともに、基本的な技を安定して行ったり、その発展技に取り組んだりすること。また、選んだ技を自己やグループで繰り返したり、組み合わせたこと。」と明記されている。高学年で発展技や技を組み合わせるために中学年で基礎的な技を身に付けることが求められている。また、運動が苦手な児童への配慮事項が新たに明記され、感覚づくりや児童に合った手立てが重要になると考える。

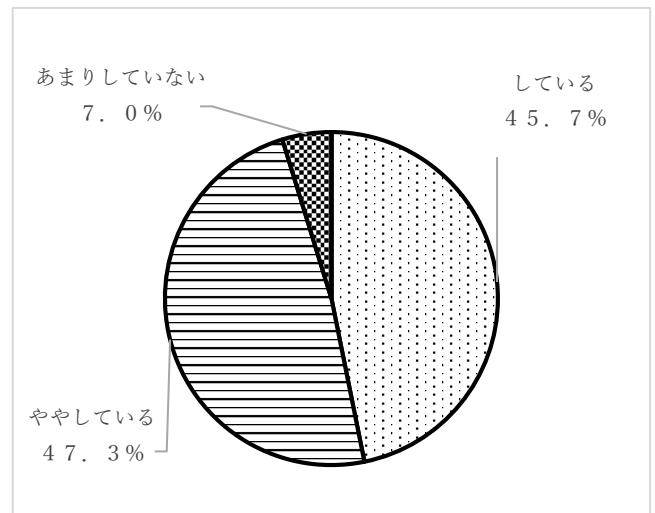
(2) 教員の実態から

体育科授業における課題を把握するため、四街道市内の体育科授業を受け持っている教職員138名にアンケートを実施した。指導が難しいと感じている領域は、器械運動と水泳であることがわかった。さらに、器械運動の中でも鉄棒運動についての指導に対する苦手意識をもっている教職員が過半数を上回っていた。理由として「児童の技能差が大きい」「手本が見せられない」「どんなアドバイスをしたらよいかわからない」という意見が多く挙げられていた(グラフ1)。鉄棒の技の指導のしやすさを聞いたところ、逆上がりが73.1%、膝掛け振り上がりが38.0%、膝掛け後ろ回りが28.7%指導しやすいと回答していた。鉄棒を指導する際に技能面に重点をおいているかという問いに対しては、93.0%が重点をおいて指導していると答えた(グラフ2)。技能面に重点をおいているが、アドバイスの仕方がわからないことがわかった。

グラフ1 鉄棒運動の指導で難しいと感じることはなにか



グラフ2 技能面に重点をおいて指導しているか



(3) 児童の実態から

四街道市内の中学年（1185名）と高学年（1415名）の児童を対象に、鉄棒運動について質問紙調査を実施した。技のポイントについて自由記述式で聞いたところ、逆上がりでは中学年58.4%、高学年53.6%、膝掛け振り上がりでは中学年31.1%、高学年32.7%、膝掛け後ろ回りでは中学年27.1%、高学年29.1%が技のポイントについて回答していた。技能面に関しては、逆上がりでは中学年52.6%、高学年53.6%、膝掛け振り上がりでは中学年33.9%、高学年39.3%、膝掛け後ろ回りでは中学年19.8%、高学年21.4%ができるとのことだった。また、鉄棒の技に取り組むことは好きかという問いに対しては、中学年76.4%、高学年58.7%が好きと答えている。

鉄棒運動の授業において、過半数の児童が技能の習得に意欲的である。しかし、技能面に重点をおいて指導をしている教員が多い中、知識・技能が定着している児童は少ないことがわかった。また、中学年で技能面の定着の低さが高学年にも影響していることがわかった。

以上のことから、児童に技のポイントをおさえる機会を設け、感覚づくりを行うことで、「わかる」と「できる」がつながり、児童が技能の伸びを実感できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

3 研究仮説

仮説1

技のポイントの提示の仕方を工夫することで知識が深まるだろう。

- 毎時間、一つずつ技のポイントを気づかせることで、知識を習得させる。
- いい例と悪い例を見比べることで、技のポイントをつかみ、知識を深めていく。

仮説2

意図的に感覚づくりを行い、ポイントを意識して取り組むことで技能を高めることができるだろう。

- 技に必要な感覚を精査し、主運動につながるような活動を取り入れ技能の習得を目指す。
- グループで見合って助言をしたり、見本と自分の演技を見比べたりできるようにし、技のポイントが押さえられているか確認しながら取り組むことで技能を高めていく。

4 研究計画

年度	月	研究内容
令和4年度	5月	実態調査項目検討・決定 実施
	6月	研究主題検討 実態調査集計及び考察 研究主題決定 理論研究 研究仮説の検討
	7月	研究仮説決定 理論研究
	8月	紙上提案 体育主任への授業内容説明
	9月～3月	市内小学校での授業実践 実践データ集約
令和5年度	4月～5月	授業実践の考察
	6月～7月	研究のまとめ 提案資料作成
	8月	研究発表